

## 平野啓子さん

[語り部・かたりすと]



古典から現代の名作までを暗誦する「語り部」として、光や音響、季節の風物を効果的に取り入れ、総合芸術として独自の世界を切り拓いている平野啓子さん。「語り」の道に進んだきっかけ、子どもたちへの読み聞かせの題材選びやポイントを教えていただきました。

## 朗読との出会い、そして語りの世界へ

今でこそ暗誦する「語り」を仕事にしている私ですが、小学校時代は人とうまく話せず、休み時間も友達の輪の中に入っていけない、内向的な子どもでした。相当親しい友達にしか打ち解けて話せず、コミュニケーションではずっと苦労していました。そんな悩みをずっと抱えていた25歳のある時、「人は趣味の話をする、どんな人も輝いて見える」ということに気づいたのです。

趣味とは、毎日知らず知らずにやっていることの延長線上にあるもの。自分を振り返ってみると、子どもの頃から新聞やチラシなど、文字が書いてあるものは何でも声に出して読み上げる癖がありました。

「声に出して読むのが好きなら朗読が趣味になるに違いない。朗読といえば宮沢賢治、宮沢賢治といえば『銀河鉄道の夜』だわ。そう思った私は、その日のうちに本を買い、朗読を開始。三日坊主の私がこれだけは1年以上続きました。そして、誘われて出かけた会で、「語り」の世界に出会ったのです。

## 心に残る、先生の朗読

小学校時代の思い出も本に関係するものが多いですね。よく覚えているのは、5年生の時の先生が『母をたずねて三千里』の原作本を読んでくださったことです。2週間かけて毎日少しずつ読んでくださったのですが、「今日はここまでね」と先生がおっしゃるのが、まるで

連続ドラマのようで、ワクワクしたのを覚えています。

今思うと、毎回「早く続きが聞きたい!」と思えたのは、先生が話の筋をよいタイミングで区切って読んでくださったからだと思います。ふだんは授業をあまり聞かない子も、それは熱心に聞いていました。

先生はもともと朗読の上手な方でした。とはいえ、みんながあれほど引き込まれたのは、私たちの顔を見回し、適切な「間」を取りながら読んでくださったことが大きかったと思います。

## 心から「よい」と思う作品を選んで

朗読でも語りでも、聞き手とのアイコンタクトはとても大切です。私はそれを「ね」という間と呼んでいます。

すらすらと淀みなく読むのではなく、ひと呼吸ごとに視線を上げ、聞き手に心の中で「ね、どう思う?」と語りかける。すると、聞き手の心の中に、話の風景が広がります。このようなコミュニケーションは、聞き手の想像の世界を広げてくれるのです。

また、作品を選ぶときは、自分自身が「これはいい!これは伝えたい!」と思えるものを選ぶことが大切です。単に「授業計画にあるから」といった外からの理由で選ぶものは、先生自身がその作品をおもしろいと思っていない場合、心に響かないと思います。

作品を選んだら、読む練習も必要です。その時、方言のアクセントを気にせず、まずはのびのびと声に出してみましょ

う。ただ、日本語としての言葉の文化を伝えるために、七五調など、作品がもつリズムは無視しないでください。

## 名作・名文は心を豊かにする

作品について言えば、教科書に載っているものは、どれも名作であり、名文です。それらは必ず、聞き手の心を豊かにします。例えば『走れメロス』では、メロスが途中で立てなくなり、「人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかったか」と開き直る場面があります。その後ひと眠りして水を飲むとわずかな希望が生まれ、「間に合う間に合わぬは問題ではない。信頼に報いなければならぬ」と、メロスの心が動いていきます。

私はこれまで何度もこの作品を上演してきましたが、どの子も「やはり信頼してくれる友達に答えるのは大事だと思った」と感想を述べます。人の心を良い方向へ動かす。これこそが名作の力ではないでしょうか。

また、私は名作・名文のもつ独特の音色やリズムを味わってもらうため、小学生に『枕草子』の「春はあけぼの」を声に出して読ませることがあります。『枕草子』は小学生には難しいと思うかもしれませんが、声に出して読むことには、子どもたちを元気にさせる力があるのです。

よい文章を声に出して読み、自分の体を通してさせることは、心にも体にもよい作用をもたらすと思います。先生方も、ぜひ実践してみてください。

## PROFILE

ひらの・けいこ ●静岡県沼津市出身。早稲田大学卒業後、東京都歴史文化財団職員を経て、NHKでニュースキャスターや大河ドラマの語りを務める。一方、名作・名文を暗誦するプロの語り芸術家として舞台やテレビで活躍中。大阪芸術大学や武蔵野大学で教鞭をとる。「藪の中(芥川龍之介作) / 山月記(中島敦作)」など、語り・朗読のCDやDVDを多数刊行。平成26年度文化庁文化交流使に指名され、海外に日本語の響きの美しさや名作の語りや朗読を伝えるために派遣される。

## 聞き手の心に問いかける「間」が想像の世界を広げます